

授業教材としての『鬼滅の刃』一試論

片山 隆裕

1. はじめに

『鬼滅の刃』は吾峠呼世晴^{ごうげこよはる}氏のマンガ作品を原作としている。『週刊少年ジャンプ』（集英社）の2016年11号で連載が開始され、2020年24号まで続いた人気作品である。日本の大正時代を舞台に、主人公の少年・竈門炭治郎^{かまどたんじろう}が鬼と化した妹・竈門禰豆子^{ねずこ}を人間に戻すために鬼たちと戦う姿を描いたこの作品（単行本全23巻）の累計発行部数は、2021年12月時点で1億5000万部を突破した。2019年にはテレビアニメ化され、物語の序章を描く「竈門炭治郎立志編」（全26話）が放送された。2020年には物語の中盤を描く劇場版アニメ「無限列車編」が公開され、国内での興行収入は403.2億円に達し、日本映画の歴代興行収入第1位となった。2021年12月5日には、劇場版の続編となるテレビアニメ「遊郭編」（全11話）の放送が開始された。2023年2月からはワールドツアー上映『鬼滅の刃』上弦集結、「刀鍛冶の里編」が

放送・配信された。また同年4月からは、テレビアニメ「刀鍛冶の里編」（全12話）が放送・配信され、さらに2024年4月からは前作を超える145以上の国と地域でワールドツアー上映「鬼滅の刃」絆の奇跡、そして柱稽古へ」を公開、同年5月よりテレビアニメ「柱稽古編」（全8話）が放送された。そして、2025年には劇場版「鬼滅の刃無限城編」（全3部作）の公開が予定されている。

筆者はなぜ『鬼滅の刃』に惹かれたのだろうか。それがどのような理由なのか最初判然としなかったが、単行本23巻すべてを買いそろえて何度も読み返し、劇場版を観るために映画館に足を運び、テレビアニメを繰り返し観ているうちに、その理由が少しずつわかってきた。筆者は文化人類学を専門として、授業で日頃から国内外の歴史、社会、文化などについて話をしているが、その内容と『鬼滅の刃』がオーバーラップしているように思えたからである。

そこで筆者は、勤務する大学の国際文化学部で開講されている「基礎演習A」（対象1年次生）の一部で2020年度から『鬼滅の刃』を材料として授業を行い始めた。『鬼滅の刃』は学生たちすべてが知っており、中には非常に詳しい、いわゆる『鬼滅の刃』オタクもいることで、少なからず受講生たちの興味を引くことができた。

では『鬼滅の刃』がわが国において一大ブームを巻き起こし、一種の社会現象となったのはなぜだろうか。こうした疑問から出発し、本論文では、多くの日本人が関心を持つ、魅力的なマンガでありアニメ作品である『鬼滅の刃』を材料として、大学の授業で何をどのように教えることができるのか、についてまとめてみようと考えた次第である。まだ「試

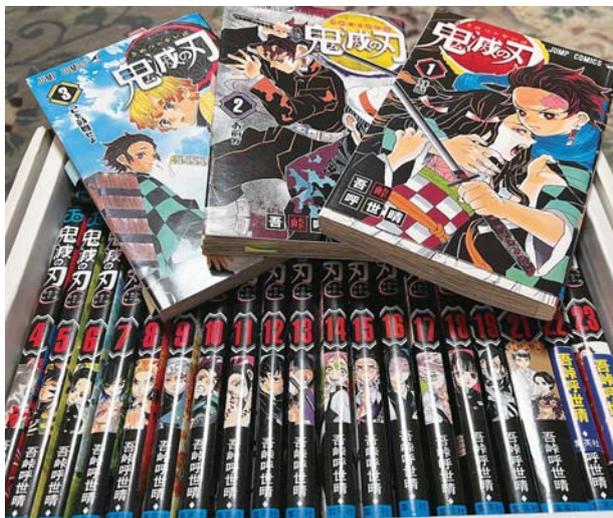


写真1 『鬼滅の刃』（全23巻＋外伝）（筆者所蔵）

論」の域を出ないが、『鬼滅の刃』に含まれる諸要素と主として日本の歴史・社会・文化とを関連づけながら、その可能性について述べていきたい。

2. 『鬼滅の刃』の概要

物語は大正時代の日本を舞台に展開する。雪深い山里に住む主人公・竈門炭治郎は、家族を鬼に惨殺され、唯一生き残った妹の禰豆子も鬼に変えられてしまう。この悲劇をきっかけに、炭治郎は妹を人間に戻し、家族の仇を討つために、人食い鬼を狩る力を持った剣士たちや彼らを支える者たちからなる非政府組織「鬼殺隊」に入隊することを決意する。この世界には、人間を襲う鬼と、それに立ち向かう鬼殺隊が存在しており、鬼は人間を食らうことで強さを増し、普通の武器では倒すことができない。一方、鬼殺隊は「日輪刀」や「呼吸法」といった特別な技術を習得、駆使して鬼と戦う。

物語の中心となるのは、竈門炭治郎とその仲間たちである。炭治郎は15歳の少年で、非常に優しい性格である。鋭い嗅覚を持っており、この能力が鬼との戦いにおいて大いに役立つ。また、彼の強い意志と優しさは、仲間や周囲の人々を勇気づける。炭治郎の妹、竈門禰豆子は、鬼に変えられてしまったものの、人間の意識を保ちながら炭治郎を支える存在である。禰豆子は、鬼でありながら人を襲うことはなく、時には炭治郎とともに鬼と戦う。彼女の存在は、炭治郎にとって大きな支えであり、この鬼と人間という両義的存在としての禰豆子が物語の重要な要素のひとつとなっている。また、炭治郎の仲間として、我妻善逸と嘴平伊之助が登場する。善逸は臆病者でありながら、いざという時には「雷の呼吸」という技で驚異的な力を発揮する。一方、伊之助は猪の被り物をした野性的な少年で高い戦闘能力を持っている。彼らの個性や戦い方は物語に多様な魅力を与えている。

鬼殺隊を率いるのは産屋敷耀哉で、その下には「柱」(煉獄杏寿郎、時透無一郎、富岡義勇、胡蝶しのぶ、甘露寺蜜璃、伊黑小芭内、宇髄天元、悲鳴嶺

行冥、不死川実弥)と呼ばれる特殊な能力をもつ男性7人、女性2人の強い隊員たちがいる。これに対して、鬼たちの頂点に君臨するのが鬼の始祖で1000年以上の時を生きる鬼無辻無惨である。無惨の下にはその能力の高い順に「上弦の壱」から「下弦の伍」まで、黒死牟、童磨、猗窩座、半天狗、玉壺、妓夫太郎・堕姫(以上が上弦の鬼)、厭夢、軀軀、病葉、零余子、累、釜鵠(以上が下弦の鬼)という鬼がいる。これらのキャラクターたちが織りなす激しい戦いとその背後にある人間ドラマが、物語を深く豊かなものになっている。そして、それぞれの登場人物の成長や関係性の変化も、物語を通じて大きな見どころとなっている。

「竈門炭治郎立志編」では、炭治郎が鬼殺隊に入隊し、初めての鬼との戦いや修行を通じて、鬼狩りとしての基礎を築いていき、鬼との戦いに必要な技術と精神力を養っていく。劇場版として話題になった「無限列車編」では、炭治郎たちが無限列車に乗り込み、上弦の参・猗窩座との戦いが描かれる。この戦いで炭治郎は新たな力を手に入れるが、炎柱・煉獄杏寿郎が猗窩座との壮絶な闘いで命を落とすという悲劇的な結末を迎える。「遊郭編」では、遊郭を舞台に音柱・宇髄天元と上弦の鬼・妓夫太郎と堕姫の兄妹との戦いが展開され、炭治郎たちの成長と共に、鬼の過去や鬼となった背景が深く掘り下げられている。「刀鍛冶の里編」では、炭治郎たちの刀を作ったりメンテナンスをしたりする刀鍛冶たちの里で、炭治郎たちは上弦の鬼・半天狗と玉壺との戦いに挑む。新たな武器を手に入れるための戦いが描かれ、炭治郎たちのさらなる成長が見られる。最後に、「無限城編」では鬼舞辻無惨との最終決戦が描かれ、物語はクライマックスを迎える。この編で全ての因縁が収束し、炭治郎たちの旅が終わりを迎える。最終回では鬼殺隊と鬼舞辻無惨との長きにわたる戦いが終結し、生き残った者たちのその後が描かれる。最終決戦では多くの犠牲者が出る中で、炭治郎、禰豆子、善逸、伊之助、カナヲの5人が最後まで生き残る。エピソードでは現代編が描かれ、炭治郎や善逸、伊之助の子孫たちが登場するが、鬼

との戦いが終わった後も、彼らの意志や絆が現代に引き継がれていることを示唆している¹。さてそれでは、『鬼滅の刃』が大学の授業教材としてどのような話題を提供してくれるのか、そしてどのような可能性をもつのかについて考えてくことにしよう。

3. 社会反映論 — アニメと社会の関係

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2020年1月15日に国内で初めて感染が確認された。2020年に入ってから世界中で感染が拡大、2022年8月までに世界の感染者数は累計6億人を超え、世界的流行をもたらした。未知のウイルスに対する有効な治療法やワクチンの開発が遅れる中、日本でも2020年4月7日に東京、埼玉、千葉、神奈川、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言が出され、4月16日にはその対象が全国に拡大、人々は制限された生活を余儀なくされた。その後、幾つもの「波」による新型コロナウイルス感染者の増減があったが、2023年5月5日、世界保健機関(WHO)はワクチンの普及や治療法の確立によって新規感染者数や死者数が減少していることを踏まえ、2020年1月30日に宣言した「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHECIC)」を終了すると発表した。

『鬼滅の刃』のヒットが爆発的に加速するのは2020年になってからであり、新型コロナウイルス感染症が流行し、人々の心の中に未知の感染症への潜在的な恐怖と不安が渦巻いていた時期と符合する。2020年4月7日の「緊急事態宣言」以降、連日新型コロナウイルスに関する報道が続く中で、『鬼滅の刃』の発行部数も伸びていった²。新型コロナウイルスの感染拡大と『鬼滅の刃』の爆発的ヒットは時を同じくするが、これは単なる偶然なのだろうか。

認識は客観的实在の意識への反映であるとするマルクス・レーニン主義の認識論を基本とした考え方に社会反映論がある。例えば、1990年代のサブカルチャーは、社会に蔓延する世紀末の雰囲気³を背景として、終末をテーマとしたものが激増した、といっ

たような見方である。これに従えば、マンガやアニメなどの作品の内容は社会の実態を反映しており、作品の内容を通して現実の社会の実態を知ることができる⁴と考えることができる。こうした視点は映画やドラマの分析などにも応用可能となり、日本のアニメや韓国のドラマの分析で卒業論文を書こうとする学生が多い私のゼミでも参考にもなるだろう。

『鬼滅の刃』の連載が開始されたのは2016年であるが、社会にブームを巻き起こしたのは2020年になってからのことであるため、新型コロナウイルスの感染拡大という客観的事実が、その流行以前に書かれた『鬼滅の刃』に反映しているというわけではもちろんない。しかしながら、『鬼滅の刃』が社会現象となった背景には、鬼を新型コロナウイルスのメタファーとしてとらえ、鬼を退治するという物語に人々が惹かれていった状況があるという点で、『鬼滅の刃』と新型コロナウイルス感染症は相互に関係している可能性がある⁵と考えることはできるだろう。

日本社会の中で、疫病と鬼は古くから深いつながりがあることが知られている。聖武天皇の治世下にあたる735(天平7)年・737(天平9)年、深刻な被害をもたらした天平年間の疫病、藤原道長の栄華を崩壊させる一因ともなった平安時代の麻疹、江戸時代の文政年間に最初に流行し、明治時代になると数年ごとに大流行を繰り返す、明治時代の45年間の死者が全国で約37万人にもものぼったと言われるコレラなども鬼と関連づけられてきた。節分に行う豆まきは病気や災害を鬼に見立てそれを追い払う儀式だが、豆をまくことで邪気を祓い、家から鬼を追い出し、福を招き入れることを目的としている。

『鬼滅の刃』でも「鬼=疫病」とする描写が多くみられ³、新型コロナウイルスに対する潜在的な恐怖と不安感が日本人の精神的土壌として息づいている「鬼」と結びついたことは容易に想像できる⁴。鬼の始祖である鬼無辻無惨との最終決戦では、鬼でありながら人間の側についた^{たまよ}珠世によって薬が投与されるが(第23巻第197話)、この薬は、①(鬼を)人間に戻す、②分裂を阻害する、③細胞を破壊する、④1分で50年老化させる、などの効果があり、ある

意味、抗生物質や抗がん剤のメタファーのようにも考えられる。無惨によって鬼化した炭治郎が人間に戻れたのは、鬼から人間に戻れた禰豆子を噛んだ際に、無惨の細胞に対する抗体をもつようになった禰豆子の血を接種したことが一因だと語られているが(第23巻第204話)、このエピソードは免疫の獲得とその血による血清治療を想起させる⁵。

当初、治療法が見つからず、ワクチンの開発にも時間がかかると考えられる状況において、コロナを恐れていた人々の中で「鬼」と「コロナ」とがリンクしていく様、そして、「コロナウイルス」に擬せられた「鬼」たちが炭治郎ら鬼殺隊の隊士たちによって退治されていくプロセスが、コロナウイルス感染症が無くなることを切望する人々の共感を呼び覚ましたと考えられる。歴史学者の磯田道史は「昔の日本人にとって鬼は祓うものだったが、今の鬼ブームでは鬼は滅びるものとして人気を博しており、鬼に対する考え方が変わってきている⁶」ことを指摘しているが、「滅びるものとしての鬼」を「消滅するものとしてのコロナウイルス」に見立てたであろう人々の願望が『鬼滅の刃』の人気の背景にあったと言えるかもしれない。

4. 文学理論 — 「モンスター理論」から見た『鬼滅の刃』

日本の代表的な妖怪である「鬼」は、昔から現在に至るまで日本の文化と強く結びついたモンスターであり、日本文化を理解するには不可欠な存在である。『鬼滅の刃』の主人公たちの「鬼」に対する見方や、作品に描かれた「鬼」の表現の複雑さを通して、これまでの「鬼」の性格を踏まえつつ、日本の歴史や文化との関連で「鬼」の存在を教材として語ることが可能になると考えられるが(この点については後述する)、同時に『鬼滅の刃』に出てくる鬼には現代的な要素が加わっており、その意味について学生たちに考えさせることができるだろう。

英米文学者のJ.コーエンは「モンスター文化(7つのテーゼ)」において「モンスター理論」という文

学理論を提唱している。コーエンはモンスターや怪物的存在を理解することが自分自身を理解するために不可欠である、という視点から「モンスターから何を学べるのか」を考える。そして、基礎となる「7つのテーゼ」によって作品の理解をより深めることができるという⁷。

一般的な鬼のイメージとしては、巨大、邪悪、人食い、角、もじゃもじゃ毛、トラ柄パンツ、棍棒、牙、ギョロ目、雷……などが挙げられる。赤鬼、青鬼など肌の色はさまざまで角、目、指の数も様々である。かつて、日本のマンガ作品に描かれてきた鬼たちを見てみても、永井豪の『鬼-2889年の反乱』(1970年)、『白い世界の怪物』(1971年)、『夜に来た鬼』(1978年)、手塚治虫の『どろろ』(1967~68年)、アニメ『まんが日本昔ばなし』(放送期間 1975~94年)、高橋留美子の『うる星やつら』(放送期間 1981~86年)など、デザインのバリエーションも多い。日本における鬼のイメージは固定的な面があるが、『鬼滅の刃』に登場する鬼も牙があったり角はあったりなかったり、目の数も様々である。『鬼滅の刃』の鬼はまた、人を食うといったような古典的な鬼の要素が入っているが、人を食べないと上に認めてもらえない、体を斬られても再生する、首を切り落とされると死ぬ、など『鬼滅の刃』の鬼特有の特徴もみられる。

鬼の始祖で鬼たちの頂点に君臨する鬼無辻無惨を理解するのに役立つのが、コーエンの「7つのテーゼ」の中のひとつである、モンスターはカテゴリークライシスの兆し(1つの枠にはめられない、下線部筆者、以下も同じ)というテーゼである。無惨は子ども、女性、男性など複数の性別や複数の年齢を行き来する。こうした流動性はカテゴリーを超えているので分類ができなくなり、行動が読めなくなり、人間側の恐怖心が高まる。人は分類できない境界上のものや境界を行き来するものに不安を抱きがちである。例えばリーチは、人間による分類においてはどうしてもどっちつかずの「曖昧」な部分が出てしまうが、その曖昧な部分が人間に不安をもたらし、人間から危険視され、曖昧であるがゆえに人

は不安感を覚える、指摘している⁸。

曖昧なもの、どっちつかずのものは、特徴づけがしにくく、頭の中で抱いているイメージを揺るがすような不安な材料になるというので、人間は分類しようとしたり排除しようとしたりしてしまう。人間による分類というのは、当事者が特別な意味づけをしていない限り、恣意的で単なる固定概念やイメージにすぎないのだが、そこに当てはまらない人が排除されたり、受け入れられなかったりということが現実に起こっている。

第2に、モンスターに対する恐怖心は実は好奇心というテーゼがある。モンスターが人気である理由は、モンスターを構成する要素の中心にある嫌悪と魅力の両義性と考えられる。人はタブーに興味があるので、モンスターの力を恐怖すると同時にその力や自由に憧れる。『鬼滅の刃』の鬼は「人間が入りにくい隙間などに隠れ、姿かたちも自由に変えられるからこそ逃げるができる。これは、モンスターは必ず逃亡する、という第3のテーゼと合致する。消したくても消せない存在として終わりなき復帰を果たす。逃亡は繰り返され、モンスターは変わっていくが、『鬼滅の刃』においても主人公・炭治郎の成長とともに鬼はより複雑化していく。

複雑化した鬼は空間をゆがめて鬼殺隊を翻弄する。鬼殺隊の隊士たちが鬼たちと戦う最後の決戦の場である「無限城」は足場が不安定極まりない。この場面については、モンスターは可能不可能の境界線を巡視する、『モンスターは〈差異の入り口〉に宿る、という第4、第5のテーゼが応用できる。自分の運命を決める社会への信頼度や自分と社会との関係性が不安定になってしまった現代だからこそ、私たちにとって世界の何もかもが不安定に見えてくる。そのとき、人はどうすればよいのだろうか。まずは、自分を取り巻く境界を認識し「外」という新しい世界、『鬼滅の刃』でいえば鬼の世界に踏み込むことでモンスターを理解することができる。そうすると今度は「内」の世界の「異常性」が見えてきて、「内」の世界をどう変革すべきかが見えてくる。外の世界へ踏み出せない人は永遠に無知ということに

なる。炭治郎が善良な鬼と悪い鬼の区別がつかない柱のひとりに「柱なんてやめてしまえ！」(第6巻第45話)と叫ぶシーンがあるが、これは鬼殺隊の世界にも変革の必要性があることを意味している。境界の外側の世界を知ることで、内側の世界の問題点を知ることになる。そのため、鬼でありながら人間の側に与する禰豆子と珠世の存在は物語の分岐点として重要となるのである。

モンスターが人間らしくなる瞬間もあれば、人がモンスターになる瞬間もある。この点には、モンスターは〈生成の分岐点〉に立つという第6のテーゼが当てはまる。何かを「怖い」、誰かを「嫌い」と感じたとき、問題は対象の中にあるとは限らず、自分の側にあるのかもしれない。「モンスター理論」によって「他者」という概念を見直すことができ、また「自分」をも見直すことができる。物語の最初のほうで、鬼殺隊の水柱である富岡義勇が「生殺与奪の権を他人に握らせるな！」(第1巻第1話)と炭治郎に言い聞かせるシーンがある。自分が無知、無力、力不足と思い込んでいた炭治郎は、義勇の言葉を聞いて想像力を巡らせ、斧のスキルを使って禰豆子を救う。こうした想像力や思考力を駆使して炭治郎は「学習性無力感」という自身の中の「障害物＝モンスター＝鬼」と戦って困難を乗り越えていく。このように、鬼は私たちの中に存在していることを『鬼滅の刃』は私たちに問いかける。こうした点は、モンスターの身体は文化を表現する体系、という第7のテーゼから考えることができるだろう⁹。

5. 神話学 — 『鬼滅の刃』に見られる神話のプロット

J.キャンベルは世界の神話に共通する英雄譚ストーリーの典型例として、「何かを奪われた人物」あるいは「大切なものが欠けていると感じている人物」が「失ったものを取り戻すため」あるいは「生命をもたらす霊薬を見つけるため」に日常生活を超えた冒険の旅に出て、そして「どこかへ行ってまた戻ってくるというサイクル」を形成する、と述べて

いる¹⁰。『鬼滅の刃』では、家族が鬼によって惨殺され、鬼にされた妹・禰豆子を人間に戻すための治療法を探して、竈門炭治郎が鬼退治をする組織に所属して、鬼が出没するスポットに繰り返し出動する物語となっている¹¹。

また『鬼滅の刃』では、英雄譚に共通する重要な要素が組み込まれているが、それは英雄が道半ばで非業の死を迎える点である。非業の死と言え、40年の流浪の旅の果てに「約束の地の目前で亡くなったモーゼ、各地で奇跡を起こしながら磔刑に処せられたイエス・キリスト、悟りを開きながら、出身国の滅亡を目の当たりにする悲劇に遭い、その後、激しい腹痛にあって亡くなったゴータマ・シッダールタなどの例が思い浮かぶ。日本の歴史においても、源義経、織田信長、坂本龍馬などが非業の死を遂げた¹²。劇場版として上映され人気を博した「無限列車編」の終末では、十二鬼月の上限の参・猗窩座との死闘に敗れ、命を落とした炎柱・煉獄杏寿郎の最期は人々の涙を誘わずにはいられなかった。鬼殺隊の「柱」たちも、そのひとりひとりが英雄譚のプロットで描かれ、道半ばで非業の最期を迎えたり、再起不能となったりするが、その意志は主人公・炭治郎たちによって受け継がれていくのである。

日本神話の特徴のひとつは、善と悪の二元論ではない点である¹³。日本神話には八百万の神々が登場するが、人間と同じようにときに悩み、ときに失敗し、ときとして過ちを犯す。こうしたプロットが『鬼滅の刃』においてもみられる。『鬼滅』では「悪」であるはずの鬼たちの過去も丁寧に描かれており、鬼たちの悲しい過去を知った炭治郎が鬼たちに同情を寄せるシーンが多い。例えば、「遊郭編」に登場する上弦の陸「妓夫太郎と堕姫」はもともと血の繋がった兄妹であった。鬼となってからも兄妹の絆は強く、片方の首が斬られただけでは死なないのが特徴である。人間だった頃、兄の妓夫太郎は、遊郭の最下層の家庭に生まれる。遊郭では化け物のように扱われながら生活をし、周りからいじめられていたため、恵まれている人間を恨み妬むようになり、性

格もかなり歪んでいた。そんな中、妹の梅（堕姫の人間の頃の名前）が生まれ、妓夫太郎の生活は一変する。梅は非常に美しく周囲から評判だったため妓夫太郎は妹を誇りに思い、次第に自身の劣等感も取り除かれていく。しかし、梅が13歳になった頃、遊郭で働いていた際、客の侍の目玉を突いて失明させてしまい、その報復として梅は縛り上げられ生きのまま焼かれてしまう。瀕死の梅を背負って歩く妓夫太郎の前に十二鬼月の童磨が現れ、鬼へと勧誘。2人は鬼となり、堕姫はおよそ10年ごとに顔や年齢や店を変え、遊女を続ける¹⁴、という具合である（第11巻96話）。確かに鬼は「悪」だが、「悪」という属性だけでは語りつくせない過去を鬼たちは背負っており、そこに心優しき炭治郎は同情する。そうした鬼たちの境遇や炭治郎の同情が『鬼滅の刃』の読者のさらなる共感を呼び覚ますことになるのだと考えられる。

6. 時代性 — 「大正」という時代

『鬼滅の刃』は主人公の竈門炭治郎が山を下りて町まで炭を売りに行っている間に家族が惨殺されることから始まる。妹の禰豆子だけは一命を取りとめるが、半分「鬼」に変えられ、炭治郎に襲いかかる（第1巻第1話）。こうした物語の始まりは、柳田國男の『山の人生』を想起させる。その第1章「山に埋もれたる人生あること」は、西美濃、つまり、岐阜県での一家心中事件についての物語的な叙述になっている。

ある貧しい炭焼の男が、13歳になる自分の息子と、やはりそれくらいの歳の拾い子の娘を山奥で育てているが、生活に困窮していく。ある秋の日、寝入ってしまった男が夕方に目を覚ますと、夕日に照らされたこの兄妹が一心に男の商売道具である斧を研いでいる。そして、「阿爺おとう、此でわしたちを殺して呉れ」と言って仰向けに寝る。こうして、この男は斧で一家心中を試みる。結局、男は子供2人を殺したものの自分は死にきれず、逮捕されて服役し、やがて特赦される段階になって

その資料が法制局の官僚であった柳田の目に触れることになったという経緯になっている¹⁵。

家族を殺した主体が「鬼」であることと「男」である点は異なるが、西美濃の山奥での一家心中事件が物語のプロットとして使われた可能性は否定できない。このように『鬼滅の刃』の始まりは柳田の「山の人生」との関係が考えられるが、こうしたところから、民俗学の面白い見方を学生たちに伝えることができるのではないだろうか。

また、『鬼滅の刃』の最初の描写から、授業の中で柳田國男の『山の人生』について語り、柳田が生きてきた明治期、大正期の世相について学生たちに語ることも可能となるだろう。『鬼滅の刃』が大正期を舞台として展開する点は、以下のエピソードから推察することができる。炭治郎は師匠である鱗滝左近次の下で2年間の修行を積み、「鬼殺隊」に入るための「最終選別」に臨むのだが、これが大正の初めだと推定される。というのは、最終選別が行われた藤襲山ふじかざやまに登場した「手鬼」が「今は明治何年だ？」と問い、炭治郎が「大正時代だ」と答えると手鬼は「年号が変わっている、俺を捕まえたのは鱗滝左近次だからなあ、忘れもしない47年前、江戸時代の慶応の頃だった。」と言うセリフからも明らかである(第1巻第7話)。

大正時代は明治と昭和のはざまにあり、それまで信じられてきた迷信や古い慣習が捨てられつつある時代でもあるが、「大正デモクラシー」と呼ばれる民主主義運動が起き、「女性解放運動」が盛んになり、「大正ロマン」と呼ばれるようにファッションその他に新しいブームが起きた、いわゆる平和な一時期であった。明治の激動期から、新たな激動期である昭和へ至る、いわゆる「はざま」の時代だったのである。

M.D.フォスターの『日本妖怪考』には、大正時代に入る直前の蒸気機関車と狸の衝突話が出てくる¹⁶。明治期、鉄道が敷かれ始めた初期の頃、人を化かす狸が出るので気を張り詰めて運行していた機関士たちは、近代化の象徴としての鉄道の威力の下、狸の変身力を信じるのをやめ、全力で機関車を

前進させるようになる。社会や人々の意識の変化が超自然的存在であった妖怪(変身する狸)を線路脇の轢死体に変えてしまう、大正時代はそういう新しい時代であった。しかしそれでも人々の意識の奥底から妖怪や鬼の存在が無くなったわけではない、『鬼滅の刃』にはそうした「間(はざま)」として大正期という時代背景があったことを忘れてはならない。

7. 日本史 — 「鬼」を通して学ぶ

小松和彦は「鬼たちがいかにして私たち日本人の精神世界に住み続けてきたのか。鬼とはいったい何者なのか」について興味深い著書を著している¹⁷。『鬼滅の刃』にも実に多種多様な鬼が登場するが、これらの鬼たちが日本の歴史に登場する鬼たちとどのような関わりをもっているのかを考察しながら、学生たちの興味を刺激する材料を提示できる可能性について考えてみたい。

(1) 阿用郷あよのさとの鬼

『出雲国風土記』(733年完成)には、出雲の大原郡阿用郷は鬼が出没して、人を食い殺した話が記録されている¹⁸。「あるとき里に住む男が山の中の畑で野良仕事をしていると、そこにひとつ目の鬼が現れ、この男をとらえて食べ始めてしまった。一緒にいた男の父母は生い茂る藪に身を潜めたが、捕食される息子を見て動揺したため、竹がカサカサと動いてしまう。これを見た男が「動く(あよ)、動く(あよ)…」と声を出したため、それ以来、そこは阿欲(後に阿用と改称)と呼ばれるようになったという¹⁹。『鬼滅の刃』には、3対の目をもつ上弦の壺・黒死牟、手に目がある矢薙芭や はば、阿用郷の鬼と同じくひとつ目をもつ鳴女なきめ(半天狗が敗死した後、上弦の肆となった)など目に特徴をもつ鬼が多い²⁰。鳴女は最終決戦において無限城を自在に変化させ鬼殺隊士たちを苦戦させているが(第21巻第183話など)、いずれにしても鬼の持つ「目」は注目に値する。

(2) 抵抗勢力としての鬼 — 土蜘蛛

馬場あき子は『鬼の研究』の中で土蜘蛛の衰亡と復讐について述べている²¹。土蜘蛛は上古の日本において大和朝廷に従わない在地土着の首長および住民に対する蔑称である。各地に存在しており、ヤマト政権は自分たちの信仰と異なる信仰をもつ集団を「土蜘蛛」と呼んで差別していた。平安時代に入ったあたりから、土蜘蛛が異形の鬼と混同されるようになっていく²²。土蜘蛛は、人間でありながら社会の構造や秩序から外れ、人間社会に対する抵抗者として描かれる『鬼滅の刃』の鬼と同じ悲哀と特徴を持っている。『鬼滅の刃』に登場するに最も近い存在として「正史で鬼とされた抵抗勢力」というわけである。

『古事記』や『日本書紀』に登場する「土蜘蛛」は、神武天皇の「東征」に対する土着の抵抗勢力で、彼らは人ならざる形質をもつ異形の集団として描かれる。『清水寺縁起絵巻』(16世紀)における坂上田村麻呂の「蝦夷征討」についても、「蝦夷はざんばら髪に粗末な衣のまさに鬼のような姿に描かれている」と指摘されている²³。

(3) 鈴鹿の鬼・大嶽丸^{おおたけまる}

桓武天皇(在位781~806年)から征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂(758~811年)は、東北の蝦夷を征伐するなど様々な武功を残した。「平安京の守護神」「將軍家の祖神」として称えられた田村麻呂には様々な怪異退治伝説がある。例えば、『田村の草子』に描かれる大嶽丸という背丈10丈(約30メートル)の鬼を田村麻呂が退治した物語がそのひとつである。田村麻呂は朝廷から大嶽丸の討伐を命じられたが、大嶽丸は三明の剣に守護されていた。そこで鈴鹿御前が大嶽丸に近づき、三明の剣を騙し取った。隙ができたところで田村麻呂が大嶽丸を討伐し、魂魄となった大嶽丸は天竺へと逃れた。その後、生き返った大嶽丸は陸奥国霧山を拠点にして世の中を乱し始めたが、再び田村麻呂に討たれた。そして大嶽丸の首は、宇治の平等院にあったとされる「宇治の宝蔵」に収蔵されたという²⁴。

『鬼滅の刃』に出てくる、いわゆる身体能力を向上

させる「呼吸」はすべて「日の呼吸」から派生したものであるが、この「日の呼吸」の使い手だった最強の剣士・継国縁壺^{つぎくによりいち}がほかの剣士に技を伝えたことで、様々な「呼吸」が生まれた。坂上田村麻呂は死後、立ったまま棺に納められて埋葬されたが、『鬼滅の刃』では継国縁壺は直立したまま絶命している(第20巻第174話)²⁵。こうした共通点を通して、学生たちに歴史を学んでもらうのもまた楽しい。

(4) リアル黒死牟・百目鬼^{どうめき}

平安時代中期の貴族・豪族・武将であった藤原秀郷(生没年諸説あり)が下野国宇都宮大曾あたりを通りかかった時のこと。老人が現れ、ここから北西に行った兎田に百の目を持つ鬼が出ると言った。秀郷が兎田に向かうと、両腕に百の目、全身から刃のような毛を生やした、身の丈10尺(約3m)もの大鬼・百目鬼が現れた。そこで、秀郷が鬼の急所に矢を射ると、百目鬼は明神山(白が峰)へ逃げた。翌朝、明神山に行くと、百目鬼は致命傷を負いながら、炎と毒煙を吐いてのたうち回っている。秀郷が困り果てていると智徳上人が通りかかった。上人が経文を唱えると百目鬼は鬼から人の姿になり、秀郷はその亡骸を丁重に埋葬した。現在でも、宇都宮市塙田には「百目鬼」という地名があり、百目鬼が関わる伝説が残されている。いくつか別々のかたちの話が伝えられているが、どれにも鬼が登場しているという。

『鬼滅の刃』の上弦ノ壺・黒死牟は鬼舞辻無惨の最古参の配下にして最強の鬼である(第12巻98話)²⁶。かつては鬼殺隊に所属していた元鬼狩りでもあり、鬼となった現在も全集中の呼吸を扱える。またその経歴から鬼殺隊の内部事情にもある程度精通している。元々は戦国時代に武家の長男として生まれており、それは同時に室町、安土桃山、江戸、そして明治を経て大正に至る約400年もの間、最強の座に君臨していた事を意味する。黒死牟は、金色の瞳の赤い六つの目を持っており、右目には「壺」、左目には「上弦」の文字が刻まれている。多数の目をもつ鬼として前出の百目鬼を想起させる存在ともいえるだろう。

(5) 鬼の首魁・酒呑童子^{しゅてんどうし}

日本の歴史上、数ある鬼退治伝説の中でも最も有名なものが、源頼光とその家臣たちによる大江山の酒呑童子退治であろう。酒呑童子は、茨木童子をはじめとする多くの鬼たちを従え、大江山を拠点としてしばしば京に出現し、若い貴族の姫君を誘拐して側に仕えさせたり、刀で切って生のまま喰ったりした。あまりにも悪行を働くので帝の命により、摂津源氏の源頼光（948～1021年）と、嵯峨源氏の渡辺綱（953～1025年）を筆頭とする頼光四天王（渡辺綱、坂田公時（生没年不詳）、碓井貞光（954?～1021年）、卜部季武（950?～1022?年））により討伐隊が結成され、長徳元年（995年）に酒呑童子の討伐に向かった。彼らは酒呑童子に姫君の血の酒や人肉をとともに食べ安心させたのち、頼光が神より兜とともにもらった「神便鬼毒酒」という毒酒を酒盛りの最中に酒呑童子に飲ませ、酒呑童子の体が動かなくなったところを押さえて寝首を搔き成敗した。しかし首を切られた後でも、酒呑童子は頼光の兜に噛みついたと言われている。

『鬼滅の刃』における鬼の首魁である鬼舞辻無惨は、永遠の命に対して執着が強いが、頼光の兜に噛みついた最強の鬼・酒呑童子の姿と重なる。また、炭治郎が鬼の総大将である鬼舞辻無惨と邂逅した際、無惨はハイカラな紳士姿だったが、これは南北朝時代の絵巻『大江山絵詞』に登場する酒呑童子を彷彿させるという。彼もまた、美しいお稚児（ちご）姿で人前に出たという逸話が残されているのだそう²⁷。

8. 日本の社会と文化 — 炭治郎と禰豆子、善逸と伊之助

『鬼滅の刃』には魅力的な登場人物が数多く登場する。優しく素直な心をもつ主人公の竈門炭治郎はじめ、鬼を退治する鬼殺隊の隊士たち、特に特集能力をもつ「柱」の面々のみならず、上弦、下弦を問わず鬼たちにもそれぞれの過去があり、その過去へ思いを馳せることで物語をより一層楽しめるのである。

(1) 炭を治める男 — 竈門炭治郎

主人公の竈門炭治郎は、鬼殺隊に入る前は炭焼きをして一家の暮らしを支えていた（第1巻第1話）。木炭は古くから使われていたと考えられ、奈良時代には大仏造営のために多くの木炭が使われたという。日常生活で木炭の需要が増えたのは近世以降だが、当時の炭はまだ高価だったので、江戸城内や大名屋敷、裕福な町屋や料亭、遊郭などでの使用に限られていた。近代になると一般庶民の生活にも浸透した。『鬼滅の刃』の冒頭に描かれているように、大正時代には山住みの人が焼いた炭を町へ売りにいくのが冬の風物詩だったようだが、こうした私たち日本人の生活に関わりが深かった炭を売りに行く描写、そして雪が降っているという季節描写は、物語の導入として非常に魅力的に映る²⁸。

炭治郎の姓である「竈門」は、『鬼滅の刃』の作者吾峠呼世晴氏が福岡県出身であると言われていることから考えると、福岡県太宰府市の宝満宮竈門神社に由来している可能性を考えることができる。宝満宮竈門神社は673年に創建され、古くは大和朝廷の出先機関だった大宰府政庁の守護のため鬼門除けとして、また、大陸へ渡る人々がこれから進む航海の安全と事業の成功を祈願したことからも『鬼滅の刃』と関係あることが推察される²⁹。また、福岡県筑後市には溝口竈門神社があり、『鬼滅の刃』とこの神社との関りも考えられる。この神社は1014年の創建とされ、玉依姫命、その左右に春日大明神と住吉大明神を祀っており、創建当時、溝口300戸の氏神として祀られた。玉依姫命は良縁の神なので、縁結びのご利益があると言われる。また「かまど」にかけて古くから台所の火事火難除けのご利益があると言われている。『鬼滅の刃』の劇場版「無限列車編」の中で、無限列車内において炎柱・煉獄杏寿郎が炭治郎に向かって、唐突に「溝口少年」と語りかけるシーンがあるが、『鬼滅の刃』ファンの間ではこれが「溝口竈門神社」が物語の聖地だとする根拠となっている。竈の神は火の神であると同時に水を支配する神である。炭治郎という名前にも火と水を治めるという意味が反映されていると考えられ、炭は火加減を操るもの、治は河川の氾濫を抑え、水をやわら

げるものという意味から成り立っていることから、名前に火と水を操る力を持つ者という意味が込められていると考えられる。

(2) 女の霊力 — 禰豆子

『鬼滅の刃』は竈門炭治郎が鬼と化した妹・禰豆子を人間に戻すために奮闘する物語である。「禰」は神が宿る場所や人の代わりになるものを意味する漢字で、「豆」は「魔を滅す」すなわち鬼除けとされる食物である。また、禰豆子のトレードマークは「竹」の口かせをしていることである。日本では、正月の門松が年神を迎えるための依代であることから明らかのように、竹や笹は古代から神が降りる神聖な植物とされた。神聖な竹で結界をつくることで禰豆子に宿る、人間を超えた力を抑える効果がある。日本神話においても、アメノウズメがスサノオの乱暴に恐れを抱いて天岩戸に隠れたアマテラスを外に出すために、天の香具山に生える笹葉をとって舞ったと伝えられる(古事記、日本書紀)。『竹取物語』で月の世界から追放されたかぐや姫が竹から生まれることも、「竹の神聖性」を表している。現在でも、竹は正月の門松に用いられ、地鎮祭などの神事に用いられ、四方に竹を立ててしめ縄を張り結界を作る³⁰。

炭治郎と禰豆子は兄妹である。男女きょうだいのペアは日本の神話や古代によくみられるパターンでもある。日本神話においてはアマテラスの弟がスサノオであり、また邪馬台国の卑弥呼には弟がいて、卑弥呼が祭祀を、弟が実質的な政治や軍事を取り仕切る体制がとられてきたとする説がある³¹。これは、きょうだい関係にある男女の首長が「聖」と「俗」をそれぞれ担当するという考え方で「ヒメヒコ制」と呼ばれる。柳田國男は『妹の力』において、古代日本における女性の霊力に関する一種の呪術的な信仰について論じている³²。ここでいう「妹(いも)」は、生物学上、社会学上の定義における妹ではなく、母、姉妹、伯母や従姉妹等の同族の女性、妻、側室、恋人など近しい間柄の女性に対する呼称をさす。女性のほうが目に見えない世界(神や死者の世界)と近い存在であり、神を人々とをつなぐ巫女的

な役割を担ってきた³³。人間と鬼の両義的存在であり、昼間は眠り、夜に起きるという特性を備える禰豆子は、炭治郎が危機に陥ったとき、度々、兄を助けるが、ここには日本社会における男女のきょうだい関係の特性が反映しているとも考えられる。

(3) 捨て子 — 我妻善逸・嘴平伊之助

炭治郎の鬼との戦いは、我妻善逸、嘴平伊之助というユニークなキャラクターをもつ友人たちとともに繰り広げられるが、善逸と伊之助はともに捨て子だったという過去をもっている。善逸は師匠で剣士を育てる「育て手」の一人であり、現役時代は「柱」の一人、鳴柱だった桑島慈悟郎に育てられ、一人前の鬼殺隊剣士として育てられた(第19巻第163話)。また、伊之助は幼い頃から野生の猪に育てられ、好戦的な野生児になった(第10巻番外編)。

日本社会において、赤ん坊を捨てる行為は近世以前においては珍しいものではなかった。平安時代の『日本霊異記』には、男遊びに精を出す母親が子どもを放置し、乳を与えずに飢えさせた話がある。かつては乳幼児死亡率が高く、幼児の人権が相対的に軽視されていた。一方で、捨て子を拾って我が子のように育てることも珍しくなかった。また、「捨て子は育つ」という言い伝えもあり、親の厄年に生まれた子や体が弱い子は、一旦、形だけ捨ててすぐに拾うと丈夫な子に育つと言われていた。明治期には年間5000人以上の捨て子がいたが、大正、昭和と時代を経るごとに減少し、昭和50年代には200~300人程度にまで減少した。しかし、一方で身寄りのない子どもたちを育てる孤児院(児童養護施設)が設立されるようになった。『鬼滅の刃』でも鬼殺隊の「柱」のひとりである悲鳴嶼行冥は、寺院で身寄りのない子どもたちを育てたことが描かれている³⁴(第16巻第135話)。

(4) 兄妹?、それとも、男と女? — 炭治郎と禰豆子、妓夫太郎と堕姫

日本近代文学においては、妹という存在が啓蒙・欲情・凌辱の対象になってきた歴史があり、日本の近代文学者たちが妹に「萌え」てきたと言われてい

る³⁵。こうしたことから考えると、炭治郎が「頑張れ、禰豆子」(第1巻第1話)、「辛抱するんだ、禰豆子!!」「兄ちゃんが誰も傷つけさせないから、眠るんだ、禰豆子」(第10巻第84話)といったように声をかけるシーンについても、単純に恋愛関係に発展しないような清い関係というよりは、妹に対する何らかの欲望の発露と見ることもできるかもしれない。

十二鬼月の上弦の陸・墮姫は基本的に兄の妓夫太郎のおんぶにだっこで、自分が首を斬られると「皆で邪魔してアタシをいじめたの!!」(第10巻第86話)、「お兄ちゃん何とかして」(第11巻第94話)と泣き喚く。無惨も「案の定、墮姫が足手纏いだった」(第12巻第98話)と、妓夫太郎と墮姫をペアにしたことを後悔するような発言をしている。墮姫は兄を支えられず、男に依存することしかできない。墮姫が鬼に「堕ちた」ということと遊郭に「堕ちた」ということが二重に描かれているのが「吉原遊郭編」である。なお、妓夫太郎が「お兄ちゃん」と呼ばれている点については、泉鏡花の『黒百合』(1898年)における「芸妓の兄さん、後家の後見、和尚の姪にて候ものは、油断がならぬ」という一節を踏まえるとなかなか味わい深い³⁶。芸妓は間夫のことを兄と呼ぶ。女の鬼が遊郭に潜んでいるという設定から考えても本当に単なる「お兄ちゃん」なのか、という含みがあるとも考えられる³⁷。

9. アニメ・ツーリズム — 宝満宮竈門神社と溝口竈門神社

『鬼滅の刃』ブームが高まるにしたがって、先述した宝満宮竈門神社や溝口竈門神社の参拝客が急増した。「竈門」という神社名が『鬼滅の刃』の主人公竈門炭治郎の姓と同じなため、「この神社が作品のルーツでは？」と話題になったのである。宝満宮竈門神社は「鬼門封じ」として建立され、『鬼滅』作品の鬼退治というテーマと重なる。また背後にある宝満山は古くから修験道で知られ、現在も修験者(山伏)が修行を行う。修験者は「市松模様」の装束を着ているが、これも炭治郎の羽織の柄と合致してい

る。作者の吾峠呼世晴氏のプロフィールは非公表だが、過去の公開情報によると福岡県出身で、これも「『鬼滅の刃』の由来は竈門神社」説を盛り上げる一因となっている。この神社で目を引いたのは、絵馬を飾る「絵馬掛所」であるが、ここには『鬼滅』の登場人物のイラストが描かれた絵馬がずらりと並ぶ。「炭治郎のように前向きに努力できる人間になりたい」「推(お)し(筆者注:好きな登場人物)が幸せでありますように」などのメッセージも添えられていた³⁸。

溝口竈門神社は、福岡県筑後市の田園地帯の矢部川沿いに位置する小社であるが、『鬼滅の刃』ブームの前と後とでは、参拝者の数が約100倍になったという。「竈門」という神社名に加えて、劇場版「無限列車編」の最初の部分で「柱」の一人である煉獄杏



写真2 溝口竈門神社に奉納された『鬼滅の刃』関連の絵馬 (2020年11月23日 筆者撮影)



写真3 溝口竈門神社境内での『鬼滅の刃』グッズの販売 (2020年11月23日 筆者撮影)

寿郎が炭治郎に向かって脈絡なしに発した「溝口少年」というセリフから『鬼滅の刃』ファンの中で注目された。2020年10月末には『鬼滅』ファンたちによるコスプレのイベントも開催され、多いに賑わった。境内には、2020年11月末に新しい社務所やトイレが設置され、御朱印の取り扱いもスタート。静かだった地域の氏神様が、突如として脚光を浴びる観光地になったわけである³⁹。

アニメやマンガの作品の舞台となった土地や建物などを訪れる旅行はアニメ・ツーリズムの名で呼ばれ、「聖地巡礼」とも呼ばれる、近年多様化してきた観光の一形態である⁴⁰。SNSが普及し身近なものとなり、SNSを通じて大量かつ多様な情報が次々と拡散される現代社会において、特に注目すべきツーリズムの一形態となっている。筆者が勤務する大学（福岡市内）の学生たちにとって、比較的身近な場所と『鬼滅の刃』とが結びつく状況を学ぶことによって、彼らは例えば、『君の名は』の岐阜県飛騨高古川、『けいおん』の京都南禅寺、『ゆるキャン』の静岡県浜名湖など、人気アニメに出てくる、自らは訪れたことのない場所に興味を持ち、その世界を広げるのに役立つと考えられる。

日本のマンガやアニメはクールジャパン・コンテンツとして世界的に注目され、海外にも多くのファンが存在する。こうした海外の日本マンガ・日本アニメファンたちは、日本に行く機会があれば、アニメの聖地を訪問したいという希望を持っており、そうしたニーズは急速に高まりを見せている。『鬼滅の刃』はタイでも「無限列車編」が2020年12月9日に劇場公開された。タイでのタイトルは『ダーブ・ピカート・アスーン』（英語タイトル：Demon Slayer、悪魔を滅する刃）で、タイでの日本アニメ興行収入第1位を記録している。タイ語では「鬼」は「ヤック」（*ยักษ์*)⁴¹と訳されるが、いわゆる日本の「鬼」という概念とは異なっており、それが理解されがたいため、「アスーン」（*อาสูน*)（悪魔、悪霊、悪鬼）⁴²というタイ語が使われている。こうした点から、『鬼滅の刃』は「文化を翻訳すること」の難しさを学生たちに教えることのできる材料にもなりうるのである。

10. おわりに

筆者が大学生だった1970年代後半頃は、マンガやアニメが研究の対象になるなどあまり考えられない時代だった。その後、マンガは社会学独自の視点から研究対象となり、その視座も多様化すると同時に社会学における地位も向上したが、カルチュラルスタディーズをはじめとする多様な学問領域の発展と相まって、マンガやアニメは多様な領域との関わりの中で論じることが可能になっていった。

本論文で取り扱った『鬼滅の刃』ブームは、奇しくも私たちを未曾有の不安に陥れたコロナウイルスの感染拡大の時期と軌を一にする。私たちは未知のウイルスであるコロナと『鬼滅の刃』に登場する奇怪かつ邪悪な鬼たちとを重ね合わせながら、意識するとしなやかに関わらず、「人を食う鬼がない世界になった」（第23巻204話）と作品の最後で描かれるような、すなわち、コロナウイルスが無くなる世界が来ることを願っていたのかもしれない。コロナウイルスの感染拡大によって多くの人々が犠牲になり、あまりにも多くのものが失われたが、「それでも俺たちは生きていかなければならない。この体に明日が来る限り」（同巻204話）という炭治郎のセリフのとおり、現実には生きている私たちも前を向いて進んでいかなければならない中の『鬼滅の刃』ブームなのであった。

筆者が所属する国際文化学部の学生たちのように歴史、社会、文化を多様な角度から学ぶ学生たちにとっても示唆に富む作品であることを確信し、『鬼滅の刃』を通して学生たちに何をどう学んでもらうかを考えてみたいと思ったことが、本論文のテーマを思いついたきっかけであった。ただ、これはあくまでも一つの試論にすぎない。筆者がまだ論じていない、あるいは気づいていない、多くの素材が『鬼滅の刃』には含まれている。さらなる研究を通して、学生たちがマンガやアニメから多くのことが学んでくれること、そしてその学ぶ楽しみを理解し、柔軟な思考や視点を養ってくれることを望んでいる。

註

- 1 マンガ愛読者の部屋「鬼滅の刃 あらすじ ざっくり解説 | 各編のストーリーと結末のまとめ」を参照しつつまとめ直した。https://mangaloversroom.com/kimetu-arasuji/ を参照 (2024年11月23日閲覧)
- 2 小和田 2020 p.141
- 3 小和田 前掲 p.139
- 4 一条 2021
- 5 小和田 前掲 pp.143-4
- 6 フジテレビ「所ジャパン」(2020年7月20日放送)における磯田道史の発言。
- 7 Cohen, J. Jeffrey 2021
- 8 リーチ, E. 1981
- 9 井島 2021を参照
- 10 キャンベル & モイヤーズ (飛田訳) 2010
- 11 滝音 2021 p.73
- 12 前掲 p.74
- 13 前掲 p.76
- 14 一部、MOVIE★PARADICE (https://www.mamemimi.com/kimetsu-demon-sad-past) を参照した。(閲覧日、2024年12月14日)
- 15 『定本柳田國男集 第四巻』筑摩書房 1968年 p.59
- 16 フォスター, M.D. 2017
- 17 小松和彦 2018
- 18 これが「鬼」が認識された最初だという。(小和田 前掲)
- 19 小和田 前掲 p.22
- 20 前掲 pp.22-3
- 21 馬場 1971
- 22 「歴史人」(https://www.rekishijin.com/29798) (2024年12月9日閲覧)
- 23 小和田 前掲 pp.190-1
- 24 前掲 p.61
- 25 前掲 pp.60-1
- 26 黒死牟は継国緑壺の双子の兄である継国厳勝(みちかつ)が鬼になった姿である。
- 27 「鬼滅のラスボス『鬼舞辻無惨』と『酒呑童子』の意外な共通点とは? 語り継がれる鬼の総大将の系譜」(みんなのライフハック@DIME)における小松和彦氏談を参照 (https://dime.jp/genre/1062096/)
- 28 滝音 前掲 pp.22-23
- 29 宝満竈門神社公式ホームページによる。(https://kamadojinja.or.jp/history/ 2024年12月9日閲覧)
- 30 滝音 前掲 pp.80-1
- 31 高群逸枝が『母系制の研究』(1938年)において提唱した仮説によれば、ヤマト王権が成立する前後の古代日本では、祭祀的・農耕従事的な女性集団の長のヒメと軍事的・戦闘従事的な男性集団の長のヒコが共立的あるいは分業的に一定地域を統治していたとされている。
- 32 柳田國男『妹の力』創元社 1942年
- 33 滝音 前掲 pp.78-9
- 34 前掲 pp.26-7
- 35 大塚 2011
- 36 泉鏡花 1941 p.270
- 37 滝音 前掲
- 38 以上、『西日本新聞(福岡都市圏版)』(2020年1月29日)を参照した。
- 39 KBC九州朝日放送「ふるさと Wish」(2020年12月8日放送)を参照した。また、2020年11月23日に筆者が溝口竈門神社を訪れた折にも、祝日だったこともあり多くの参拝客で賑わっていた。境内にはテントが張られ、『鬼滅の刃』グッズが売られ、地元の年配女性たちが「鬼滅の刃」のキャラクターを描いてお参りするための絵馬を販売していた。
- 40 岡本 2015
- 41 タイ語で鬼は「ヤック」と言う。ヤックは、もとは古代インド神話に登場する「ヤクサ」という鬼神だったが、仏教に取り入れられ、護持神となった。バンコクにある王室寺院ワット・プラケーオでは、魔除けのために巨大なヤック像が安置されている。
- 42 松山納『タイ語辞典』大学書林 1994年 p.1190

参考文献

- 池上 賢 「社会学におけるマンガ研究の体系化に向けてーデータベースによる先行研究の整理・検討から」『応用社会学』(55号) pp.155-173
- 井島・ワッシュバーン・パトリック 「モンスター理論からみた少年マンガの「鬼」―「鬼滅の刃」を事例として」『崇城大学芸術学部研究紀要』(第15号) 2021年
- 泉 鏡花『鏡花全集 卷四』岩波書店 1941年
- 一条真也 『「鬼滅の刃」に学ぶ―なぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたのか』現代書林 2021年
- 大塚英志 『「妹」の運命：萌える近代文学者たち』思潮社 2011年
- 岡本亮輔 『聖地巡礼―世界遺産からアニメの舞台まで』中公新書 2015年
- 小松和彦 『鬼と日本人』角川ソフィア文庫 2018年
- 小和田哲男 (監修) 『鬼滅の日本史』宝島社 2020年
- キャンベル, J. & B.モイヤーズ 『神話の力』(飛田茂雄訳) 早川書房 2010年
- 吾峠呼世晴 『鬼滅の刃』(全23巻+外伝) 集英社 2016年~2020年
- 高群逸枝 『母系制の研究』理論社 1955(初版1938)年
- 滝音能之 『鬼滅の暗号―解説の書』宝島社 2021年
- 馬場あき子 『鬼の研究』ちくま文庫 1971年
- マイケル・ディラン・フォスター 『日本妖怪考』(廣田龍平訳) 森話社 2017年
- 柳田國男 『山の人生』『定本柳田國男集』(第4巻) 1968年
- エドモンド・リーチ 『文化とコミュニケーション―構造人類学入門』(青木保、宮坂敬造訳) 紀伊国屋書店 1981年
- Cohen, J. Jeffrey 2021 *Monster Culture (Seven Theses) in Mittman, A.S. & Hensel, M. Classic Reading on Monster Theory, Cambridge University Press.*